

# 学問の領域<sup>1</sup>

—真理はわれらを自由にする?—

別府大学文学部人間関係学科  
教授 篠藤 明德



「建学の精神」と筆者

## はじめに

今年度の公開講座のテーマは、「学問の多様性」です。様々な分野の専門家が講義を担当します。その中で、私は自分の専門から離れ、学問の領域について考えてみたいと思います。今年度で退職する私が、長い間感じてきたことを少し整理したいと思ったことも理由の一つです。また、昨年度大学70周年を迎えた別府大学の建学の精神「真理はわれらを自由にする」を再度考えたいとも思いました。ただその前に、2つのことを述べておきます。

まず、「学問」という言葉を使うとき、いつも難しさを感じてしまいます。というのは、2つの

異なったニュアンスがあるからです。つまり、「十五にして学を志す」という論語の言葉に代表されるように、「学問」は「人としての道を極めること」という儒学的伝統に沿ったニュアンスを持ちます。

他方、「科学」という言葉に置き換えられるものがあります。「大学は学問の府」というとき、或いは、「〇〇学」というとき、近代諸科学として成立、発展してきたものを指しています。今回論じようとしている「学問」もこうした「科学」という意味です。「科学=サイエンス」というと、自然科学の意味に捉えがちですが、人文科学、社会科学と言われるように、ここでは広義の意味における「科学」を指しています。

次に私の立場です。先ほど「私の専門」という

<sup>1</sup> 本稿は、2021年12月14日、公開講座（国際文化論Ⅰ）で講義した内容をもとに書いたものです。私はこれまで「大学教育」に関して以下の2つのエッセイを書きましたが、本稿は、それに関連するエッセイです。また、本誌掲載の別稿の第2章も同様です。合わせて読んでいただければ幸いです。

・「別府大学とこれからの社会」、地域社会研究第28号所収（P1～5）、2017年3月

・「社会変化と大学教育の矛盾——一人ひとりの未来に寄り添う教育を——」、地域社会研究第29号所収（P1～9）、2018年3月



言い方をしましたが、私は、大学は学部しか出ていません。普通、研究者になるために、大学院に進学し修士号、博士号を取得しつつその道に進みますが、その意味では、私は「研究者」ではないということです。こうした自分が、大学教員としての職を得て、いくつかの学会に所属し、また、論文を書いてきました。そして24年が経とうとしています。私はいつもどこかで「よそ者」という意識を持ってきました。今となっては、このような立場も悪くなかった、と思っています。そうした外部者（或いは一般人）の目で大学、学問を見ることができた気がします。本稿の視点には、そのような背景があります。

「学問の領域」を論ずるのは、学問的にいえば、科学哲学、科学社会学、科学史という「メタ科学」の専門領域に委ねられるものです。しかし、私はそのような専門家ではありませんので、学問的に見ると、本稿は「素人のエッセイ」です。そのことは最初に明言しておきたいと思います。

## ① 学問の特徴

### 学術論文

学問の世界では、何よりも「論文」を書かなければなりません。文章には色々なスタイルがありますが、学術論文にも厳しいスタイルがあります。一般人には馴染みのない文章形式です。私が学会に所属した時に、若い研究者が論文の抜き刷りを抱え、関係する研究者に手渡していたことやその論文を「玉稿」などと呼んでお礼を言うことなど、とてもびっくりした思いがありました。人が読まない文章を一生懸命書く人々がいるのだ、ということが驚きでした。つまり、一般の人は、あまり目にしない文章なのです。

学術論文の形式は、まず特定のテーマに関する先行論文を研究し、その中から、これまで明らかでない問題を取り出すこと（問題の所在）、続いて、検証すべき仮説を明示し、その問題をどのように明らかにするのか（研究方法）を述べ、分析の上、明らかになった研究成果を記述します。最後に、論文では取り上げられなかったこと等、その限界を述べます。概ねこうした形をとります

が、論文の審査は、その論理性、実証性など妥当性のチェックを研究者相互のレビューに委ねられます。こうした機能が学会や研究雑誌における査読の役割となります。こうした厳密化は、次に述べる学問の細分化、部分化に繋がっていきます。

学問は、このように先行研究批判の上に蓄積されていくものですし、普遍的であるがゆえに、時代や場所を超えるものです。あとで述べますが、実際のところ、自然科学はこのように普遍的な性質を強く持ちますが、人文科学や社会科学などはどうしても地域性、時代性の制約を受けるものです。しかし、その概念、論理、研究方法は基本的に「普遍的」であると考えられています。それ故、ほぼすべての分野で国際学会が組織されています。

### 学問の細分化

今日学問の特徴の一つがその細分化です。私自身、日本政治学会に所属していますが、「政治学」の分野でも、「政治理論」「比較政治」「政治体制」「国際政治」「地方自治」「公共政策」などなど、更に多く枝分かれしています。従って、その細分化された分野に応じて異なった学会が組織されています。他の学問分野でも同様です。

このように、今日の学問の大きな特徴は、個別化・細分化であると思います。10年前の話ですが、政治学者の篠原一先生が、戦後、政治学を志した研究者は、「政治という化け物」と格闘するために、自分の専門領域（先生は西洋政治史）を越えて、同僚が書いた論文をすぐ手に入れ読んだものだった、と言われていました。しかし、現在は、東大の政治学者でも自分の分野だけを追いかけるんだね、と続けて言われていたことを思い出します。

先ほど、学術論文の体裁について書きましたが、自分の領域（あるいはテーマ）における先行研究批判に基づく、というのは、学問形成においてとても大切な土台です。しかし、その限定された設定では、特に、人文科学、社会科学の領域において「真実」に近づくことはなかなか大変です。

### 学問の膨大化

日本全国には、現在、800を超える大学がある

と言われています。その多くの大学で大学院を設置し、博士号を授与しています。博士号は、その分野において誰も取り扱っていない新しい知見を示し、その学問的妥当性が吟味され、与されるものと考えられていますが、毎年、追いきれないほどの研究が報告されています。つまり、今日の学問の特徴は、その膨大化です。日本だけでそのような状況ですから、世界における学術論文の膨張は想像できない規模でしょう。

後に述べる学問の制度化、職業化が起こる以前、つまり、17世紀、18世紀のヨーロッパは啓蒙の時代と言われていましたが、理性の活動は、現在との比較で言えば、考えられないほど小規模で統合されていたということをまず確認しておく必要があります。

## ② 近代的学問の展開

### 科学革命

通常、科学史という分野で、近代科学の始まりは17世紀とされています。これには、ニュートンのプリンピキアが大きな役割を果たしています。世界の現象を力学的に、つまり、万有引力の概念と数学的に説明しました。こうして、人々の主観的偏向を排除し、まさに「普遍的」なものとして確立していきます。

考えてみると、「我思う、故に我あり」を唱えた近代哲学の祖であるデカルトもそのライバルであったライプニッツも数学者です。また、カントも天文学の研究を数学的に行いました。こうした数学的演繹的説明力とともに、実験を通し反復検証できる帰納的説明が、学問の普遍性を形作ってきました。

中世の魔術的世界から解放され、理性に基づく確からしさによって構成される世界理解は、18世紀の啓蒙の時代において「人間解放」をもたらすと期待されました。

### 制度化：大学、学会

こうした科学精神が、社会の中で根付いていったのは、19世紀であると言われています。17世紀、18世紀に展開された学問（科学）は、社会的

に言えば、まだ組織化、制度化されたものではありませんでした。別の表現で言うと、職業化されてはいなかったということです。しかし、19世紀になると、学問は、研究所、大学で職業として行われます。この分野で大きな展開をしたのはドイツの大学であり、大きな興隆がありました。ベルリン大学を創設したフンボルトの大学理念は有名ですが、そこでは、学問と教育の一体が語られています。今日との比較では、大学院大学といってよいでしょう。

ただ、ここで確認しておきたいことは、学問が分業的に職業化されたことです。「普遍」を求める理性の活動が、このような枠組みに置かれたということはとても大きな変化でした。17世紀、18世紀の学問と大きく変わっていますし、こうした職業化・分業化は、今日ますますその傾向を強めているのです。

### 理性への疑い

科学革命や啓蒙の時代を担った多くの学者は合理性を追求しましたが、それぞれの研究者は、まだしっかりとした信仰を持っていました。しかし、19世紀になり、神の存在や信仰自体を批判する傾向が強くなり、それとは切り離された合理性を求める理性的活動として学問が立ち現れてきます。そこで、「学問はわれらを自由にする」のか、という疑問が提出されます。

また、そもそも学問は真理を明らかにすることができるのかという疑問も出されました。人が問い得るのは何か、ということで命題の論理性にのみ焦点を当てた論理実証主義がありました。また、ニーチェのように、ニヒリズムに落ちいった思想家もいます。社会学の基礎を築いたウェーバーも、近代社会は合理的法の支配が進行し、人々は「鉄の檻」にいるようであると危惧しました。アーレントが指摘したファシズム、ナチズム、スターリニズムの「全体主義」は、前近代までの暴力的専制主義とは全く異なり、規則的、組織的、つまり、「合理的」に体系化され実施された近代の体制でした。ウェーバーが予感した「鉄の檻」が実態化したようです。

## 学問の道具化

科学的知識は技術革新を起こし、新しい産業の種、推進力になります。また、軍事はじめ国家の力ともなります。この意味で、近代社会における学問・科学は中心的地位を占め、その制度として高等教育機関における成績は、社会における地位・役割を獲得する上で決定的になります。

また、科学自体も実験装置はじめ様々な面で莫大な資金が必要になります。スーパー・コンピュータや宇宙探査にかかる費用を見るだけで容易に理解することができますし、その傾向はますます加速しています。つまり、単なる理性的行為というにとどまらず、社会的行為、社会的現象として理解しなければいけません。科学技術社会論の分野が注目されてきたのもその表れです。

今日の学問の大きな特色が、この科学知識→技術化→産業化という流れです。しかし、このベクトルは逆に示すこともできます。つまり、新しい産業を起こすために新技術の開発が要請され、そのために膨大な資金が投入されます。その結果、新しい科学的発見が可能となる、という流れです。戦後、軍事技術であったインターネットが金融市場に取り込まれ、多くの数学モデルが開発されたことはその一例です。産業、国家意思が科学を創造するのです。この傾向はますます強くなっています。

また、細分化とともに、こうした技術化、産業化は、「学問の道具化」という側面を強化しています。今日、人口の半数が大学に進学し、「専門的知識」を修得しようとしています。学問というより「実用的専門知識」の需要が拡大しているからです。つまり、専門化は資格化に進み、それは特定の職業を前提にしています。こうした高度専門職業の知識・技術を身につける場が大学と一般的に思われているのではないのでしょうか。

## リスク社会論

確かに、近代の技術革新は一面豊かな社会を作ってきましたが、他方それ自体が大きなリスクを同時に作っていると考えられています。原子力発電は大きな電力を安定的に生産しますが、放射性廃棄物は蓄積されたままです。遺伝子組み換え

作物は食糧危機解決の切り札にもなり得ますが、これが将来何をもたらすかは不明です。これが、ウーリッヒ・ベックが唱え、今日まで大きな影響を与えているリスク社会論です。

こうした考えは、生態系のリスクだけではなく、合理的考えは私たちの思考に還元し、その認識枠組み自体を変化させます。こうして、理性的活動は永遠の循環構造を持つ、というのが「再帰的近代」という考え方です。であれば、学問は変わらぬ真理に導くことはない、ということになります。

また、ベックもギデンズも、こうした再帰的近代は、私たちの「親密圏」における信頼などにも批判的刃を向けていると論じています。こうした中から、新しい信頼の基盤を作り替え変えなければならぬのが現代であるといいますが、これは大変苦しい立場であると言えます。

現代人が苦しむ「不安」はどこから来るのか、を論ずる力には私にはありません。ただ、「生きる」上で、「信ずること」はきっと大切なことだろうと思います。学問に不可欠な一面である「批判精神」は、束縛、盲信からの自由を与えてくれますが、他方、「信ずること」を切り崩す力もあります。ともすれば、この苦しみから逃げ出し、理性的営みを放棄したくもなります。

現代に生きる私たちは、こうした理性批判に真摯に向き合わなければなりません。

## ③ 学問外の領域

これまで、学問・科学について考えてきましたが、こうした活動は、ココロの活動で、通常、認知機能と呼ばれます。物事を知る、という活動です。しかし、ココロの活動の中には、物事を感じる、という部分があります。情動性と呼ばれる機能です。また、ココロと身体の関係も重要でしょうし、最近の脳神経科学の研究が明らかにする「社会脳」と呼ばれる部位とその機能など、社会性と関係するココロの領域もありそうです。これから学問外の領域について少し考えたいと思います。

## 美的体験

私には画家の叔父が一人います。現在も90歳を超えてなお描き続けていますが、ヨーロッパに住む私に言った言葉をよく思い出します。ヨーロッパの町には大きな美術館がありますが、中を見て歩くだけで1日かかる場所も少なくありません。日本人の多くは、まず知識として有名画家の作品を理解し、それから観ようとしますが、叔父は、頭であまり考えず、まず何度もいろいろな作品を見ていくことが大切だと言いました。最初、良いと思った作品から別な作品に関心が移っていく。心に留まる鑑賞体験を大切にすることだよ、大きな美術館が充実し、安く入館できるヨーロッパに住んでいるのだからね、と言ってくれました。

ヨーロッパの街中には、こうした美術館ばかりではなく、街角、路地裏などに小さなギャラリーをよく見かけました。商売としてよく成り立つなあ、などと下世話な気持ちを持ちながら、ふらっと入っていく楽しさがありました。また、路上で絵を描く人、楽器を奏する人もよく見かけます。その周りに人が囲み、納得すると小銭をカゴに入れ、立ち去って行きます。「美的体験」です。心でそのものを受け止め体験することなのでしょう。

学生の頃、東京に住んでいた時、ある会社の社長から言われたことを思い出します。その方は、高級官僚で吉田首相の秘書官もしていたそうです。その後、民間人として大きな会社を起業しました。ただ、私が会ったとき、脳梗塞を患った後で手足が不自由でした。おにぎりの美味しさ、一輪の花の美しさ、などを若い私に語ってくださいましたが、食欲旺盛で野心に溢れる私には、理解することは無理でした。その時に、多くの人は「美盲」だ、といわれました。この言葉は現在では不適切な言葉ですが、美しさが周りにあふれていてもそれを認識することができない、という意味で言ったのでしょう。「美的体験」の大切さを言われたものとして思い起こします。

芸術は、時として破壊的力を持ちます。通常の秩序の虚構を暴き、私たちを場合によっては「不安」に落とし込みますが、理性的行為・活動とは異なった形で、その中に「真実」を感じるもので

す。小説を見ても、最近、瀬戸内寂聴さんが亡くなられましたが、彼女の燃えるような情念に基づく行動やその諸作品は、「不道德」そのものかもしれないませんが、そこに人間の業とも呼ぶべき「真実」が現れているのでしょう。こうした作品と接する中で、人間は本当の意味で考えるようになります。

このように、芸術活動・体験も人間の心の活動として大切な意義を持っています。

## 生活知、実践知

さて、毎年秋になるとノーベル賞受賞者の発表が行われます。それぞれの分野で画期的な学問業績を示した学者に授与されます。その意味で、受賞者が学問的に秀でた方というのは疑いがありません。ただ、こうしたときに必ず報道されるのが様々なエピソードです。それも学問業績と関係のない家庭での生活などが、エピソードの定番といっても良いでしょう。

2008年にノーベル化学賞を受賞された下村脩博士はクラゲの発光体に注目され研究されました。しかし、家族にとっては長い間、悲惨（笑）だったことなのでしょう。なぜなら、夏休み、海辺に行くとクラゲ取りをしなければならなかった、と言うのですから。多くの学者が、生活上、普通の人ではなく、家族が温かく見守った、いうエピソードが、ノーベル賞報道の時の定番です。実際はわかりませんが、学問と生活の分離は普通です。こうした学問知とは別に、人間は生活する上で「生活知」を持っていると言われます。生活知は学問知とは別の内容を持ち、それを持たなければ、生活できません。

また、「政治学者と政治家」「経営学者と経営者」は違う、とよく言われます。この場合、政治家、経営者も学問知とは異なる実践知を持っています。論述される知（形式知）に対して、「暗黙知」の存在を唱えたマイケル・ポランニーは多くの分野に影響を与えました。「部分を事細かにすることで被るダメージは、取り返しのつかぬものになりかねない」と言い、彼は諸要素の理解と包括的理解の関係に関し述べています（ポランニー、P42）。古くは、アリストテレスが倫理の基礎と

して「賢慮」を唱えたこともよく知られています。つまり、知の分野であっても、論理的・実証的に表現された知に対し、別の知の世界があるということです。こうした知はどのようにして身につくのか、というと、多くの場合、人間関係の中で、と言われます。他者との関係の中に身をおき、会話したり表情・身振りを感じたりする中で育まれる、と言います。それも苦しみながら、です。

先ほど「生活知」ということで少し触れましたが、人が生きる上で、「信じること」は重要です。不信を土台に生きることはできないでしょう。では、安定した信頼はどのように持つことができるのか。この「信じること」と学問の関係は何か、ということになります。この問いを、長い間人間は持ってきました。一面は、宗教との関係で論じられましたし、また、伝統的信念との関係もあるでしょう。既に、ベックやギデンズの議論に関して述べましたが、この問いは、知的に整理して終わり、という性格ではないと感じています。ただ、こうした領域があるということをここでは確認したいのです。

### 身体性

人間は身体を持っています。体を動かすとココロも軽くなり、ある種の喜びを感じます。身体は外界と接しますが、歩く、走る、山に登る、海で泳ぐなど、身体が自然と接し交流する中で生きる力、安らぎを感ずることがあります。ヒトは生態系の一部でしかないのでしょうか。こうした領域も大切にしたいものです。

精神は、宇宙の果てからミクロの世界まで自由に活動を広げ、非現実と思われる夢想の世界にも旅立ちます。しかし、肉体は頑固に一定空間に止まり続けます。私は、長い間、「地方自治」の講義を担当してきましたが、私たちにとって、身近な空間はどんな意味があるのか、と考えてきました。インターネット空間が発達し、ヒト・モノの移動が拡大、急速化する中で、身近な空間はどこまで意味があるのか、ということです。そうすると、どうしても、身体性を土台にして考えなければいけません。

また、身体性の特徴に「定形型活動」がありま

す。朝起きる、食事をする、呼吸する、排泄する、夜寝る、など繰り返し決まった活動を要求します。こうした定形型活動に支障が生じると途端に病気になる不安になります。進歩、発展、変化とは異なった領域として存在しています。

そして、何よりの「身体性」の意味は、「人間は死ぬ」という自覚です。しかも、その死はいつ訪れるかわからないという不安を伴っています。実存的不安です。人生の意味、という時の根拠は「身体性」にあります。

## ④ 「真理はわれらを自由にする」?

### 聖書の言葉

昨年度は、別府大学が創設されて70周年でした。12月18日には、70周年記念行事が行われます。本学の建学の精神は「真理はわれらを自由にする」です。この言葉は、ヨハネによる福音書8章32節のことばで、西洋ではとても一般的な言葉です。次のように書かれています。

イエスは自分を信じたユダヤ人たちに言われた、「もし私の言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは本当に私の弟子なのである。また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」  
(ヨハネによる福音書8章31節、32節)

キリスト教の教えでは、唯一絶対の神が完全なロゴス（理法）をもとに全てを創造したわけですから、真理、つまり、神との出会いは私たち人間を自由にする、と言うことは理にかなった言葉です。ヨーロッパの大学の起源にも神学があったように、また、17世紀、18世紀の理性の時代と言われた啓蒙の時代でもこうした信仰に深く根ざしたものでした。

### 古代ギリシャからの学問

古代ギリシャでは、天文学、力学など様々な学問が展開されました。その中で、千変万化に変化する現象の背後に何があるのか、という関心に基づき、根源は火である、水であるなどの議論の中

から、原子(アトム)という考えが出てきました。また、プラトンのイデア論のように、現象の背後に変わらぬイデアが存在するとも考えられてきました。こうした根本を尋ねようとする思索は、古代インド、古代中国などでも見ることができます。人間の普遍的精神現象、つまり、理性の働きということができるでしょう。学問がこうした理性に根ざしていることは疑うことはできませんが、ルネサンスを経て啓蒙の時代でも、理性と信仰が一致していた幸せな時代ということができます。

### 飛翔する理性の素晴らしさ

私は、近代学問の展開を論ずる中で、学問の否定的側面に言及していました。しかし、結論から言えば、私自身、理性の力は万能ではないという限定の中に立ちながらも、その素晴らしさを認めています。ここでは、本稿との関係で、私に希望を与えた3人の哲学者について簡単に述べたいと思います。

### ユルゲン・ハーバーマスの間主観性

だいぶ以前になりますが、ユルゲン・ハーバーマスの「コミュニケーション的行為の理論」を読んだとき、「間主観」という言葉に出会い、長い間苦しんできた主観・客観の分裂、対立の闇が晴れるように感じたことを思い出します。

人間は言葉で思考しますが、そもそも言葉、文章は対話構造を持っているというのです。この観点から、主観・客観ではなく、「間主観」が論じられるわけですが、ここからハーバーマスは、命題の論理性と客観的世界の対応を求める真実性、その命題が交わされる相互人格関係における正当性、話者と命題の一致に関係する誠実性の妥当性を論じました。こうして形成される客観的世界、社会的世界、主観的世界との間で「不一致」があることが前提で、それをなくすために(或いは、減少させるために)、ディスクルス(討議)が起きると考えました。

目的合理性(道具的理性)の支配する政治シス

テム、経済システム等に対して、生活世界に根ざすコミュニケーション理性に基づく妥当性の吟味から「公共性」を基礎づけました。こうした議論は、私自身、熟議民主主義やミニ・パブリックスを考える上で大きな力を与えてくれました<sup>2</sup>。また、「未完のプロジェクト」として「近代」の啓蒙を取り上げ、その理性の力を信頼する姿勢に共感したことをよく思い出します。

### ランガーのシンボル哲学

また、最近、ミニ・パブリックス研究フォーラムとともに組織する東工大の坂野達郎教授から面白い本を紹介されました。「シンボルの哲学」というスザンネ・K・ランガーが書いたものです。この夏、2週間ほどその本に線を引きながら読み続け、本当に嬉しく思いました。現代哲学は、ヴィトゲンシュタインの「論理哲学論考」で一つのピークを迎えたとも言われています。論述的記述による妥当性はその論理構造の明快さによって担保されますが、それを論じ尽くしたというのです。こうした中で、後期ヴィトゲンシュタインの「哲学とはビンの中のハエのようなものだ」というような言説になってきます。しかし、論理学者として出発したランガーは、論述的シンボル(命題)だけではなく、情動が対象とする芸術の解釈として現示的シンボルを抽出しました。ココロの活動としての認知的世界だけではなく、芸術的世界に対しても哲学的基礎を築こうとしたのです。

### マイケル・ポランニーの暗黙知

既に言及したマイケル・ポランニーは、戦前、物理学・化学という自然科学の領域でその才能を発揮し、ノーベル賞を必ず取るだろうと思われていました。しかし、彼は、史的唯物論に立つ共産主義の理論家ブハーリンとの対話に衝撃を受け、また、力を持ちつつあった実存主義哲学との対決の中から、自然科学の知を基礎付けようと「暗黙知」の概念を展開しました。論理的に記述される前に、人間はその対象に対し「直感的総合的理解」つまり「暗黙知」を持っていると考え、その構造

<sup>2</sup> 詳しくは、「新しい市民参加と討議デモクラシーとの連関」、地域社会研究第13号所収(P12~17)参照。

を明らかにしていきます。この暗黙知の構造の中に学問の「創発性」があると考えました。私自身、こうした哲学の妥当性を論ずる力はありませんが、マイケル・ポランニーが指摘した暗黙知の理論は、今日でも科学哲学における専門知の考察になお影響を与えていますし、経営学で名高い野中郁次郎教授の理論を基礎付けています。

ここで取り上げた3人の哲学者は、「学問の領域」を考える上で参考になりました。つまり、道具的理性の展開としてのシステムとコミュニケーション的理性、論理的記述と芸術に共通するシンボル哲学、暗黙知と形式知などの考察などです。私たちが細分化、技術化する学問に専心する際、常に念頭に置くべき基礎であると私には思われます。

カントの認識論は、感性、悟性、理性の3段階として言われてきました。物事を概念化し分類する認知機能は、理性前の働きと考えられたわけですが、理性は、物事から離れ、自由に躍動するものと考えられました。もちろん、知性的段階を無視してということではありません。

私がハーバーマス、ランガー、ポランニーなどに感動するのは、しっかりと知的土台に立ちながら、理性の翼を広げ、粘り強く論理を展開していることです。ここに理性の変わらぬ素晴らしさを感じます。

現在の学問の主流は実証的研究になっています。確かに、データを収集し統計学などを用い分析する手法は手堅く、「客観的」であり、それ故、「普遍的」であるように思われます。しかし、研究の出発は、あることを知りたい、こうなのではないか、という思いがあるはずで、そして、限定された研究方法を使って、その思いを推論することです。

優れた研究者が厳密な研究生生活の終わりに、グランドセオリーや概論を書くのは、研究生生活のはじめに抱いたイメージをもう一度振り返る作業でもあります。こうした自由な知的活動こそが理性の働きであることを忘れてはなりません。

「君たちはどう生きるか」?

数年前、吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」が漫画も含め大ブームになりました。勉強を就学前から始め、現在では、半分以上が4年制大学に進学する長期学習は、私たち一人ひとりが「どのように生きるか」という人生の土台を築く上で、どれだけの意味があったのか、と問い直す必要があります。そもそも現代の学問は、このような価値観とは関係なく存在しているのかもしれませんが、しかし、であれば、多くの人々にとって学問の意義とはなんなのでしょうか。今日の知識社会の中、知識こそ価値の源である気がしていますが、これは社会的有効性の問題です。「生きる意味」ではありません。

ただ、全ての学問には、哲学的基礎があります。理性の土台には哲学的思索があります。その意味で、私は、今日の道具化した「学問」において、哲学的土台を見つめ、専門前の（あるいは、専門と並行した）哲学的関心や幅広い教養を取り戻すべきだと考えています。

人間の精神活動を対象にする人文科学や、人の集合である社会を対象にした社会科学であれば、こうした哲学的土台の吟味が大切なことは当然でしょう。「実証」という方法に安住してはいけません。自然を対象にした自然科学であっても、その応用である科学技術やその産業化、政治性を考える時、メタ専門知としての吟味が不可欠なことは言うまでもありません。現在は、大きな変化の時代を迎え、理性がもう一度羽ばたくときである、と感じています。

#### 一応のまとめ

本稿では、「学問の領域」について考えてきました。知性の活動領域として学問は価値を持ちます。また、その土台を考え続ける哲学の意義、広範な領域に思考を巡らすことは、素晴らしい理性の領域として、これからも私たちに自由を与えてくれると私は信じたい。

と同時に、「領域」という言葉がすでに示しているように、他の領域、つまり、実践知、美的体験、身体性などの領域抜きに「自由を感じる」場所はないのではないのでしょうか。こうした様々な



場、体験を自由に行き来する時代がいま来ようとしているという気がします。

「真理はわれらを自由にする」という建学の精神を持つ別府大学は、「学問ゴッコ」ではなく、真摯に身を削るように学問的真理を追求してほしいと思っています。別府大学を佐藤義詮先生とともに創ってきた川島つゆ先生、賀川光夫先生は、文字通り命をかけて学問をしてこられました。現在大手を振って拡大している「理性の道具化の風潮」に抗い、哲学的思考、領域を超えた関心、社会的問題意識を大切にしながら進んでほしいと願っています。また、大学の壁を低くし、境界をファジーにしながら、社会と交流することを願っています。社会の様々な活動や人々に「本物の学び」があることが多いものです。学生は、学校の枠から飛び出て、様々な出会い、体験を大切にしてください。「真理はわれらを自由にする」のですから。

## ● おわりに

私は、祖父が始めた新興宗教の家に生まれました。祖父は昭和恐慌で莫大な借金を背負い、極貧生活を送る中で子供を失っても葬式をあげるお金がなかったそうです。その後、厳しい修行の中、信仰体験をしてきた祖父にとって、書物は意味のないものでした。高校時代、祖父が私に「本に何か書いていると思うか」と静かに問いかけたことが新鮮でした。私は、本を読んでいる、勉強をしていると言うと、褒められるのが普通と考えていましたから。

反対に、祖父の跡を継いだ父は、学問に憧れていましたが、戦争で夢果たせず、子供達に託したのだらうと思います。私自身、高度成長の波の中、立身出世を夢み、受験戦争を勝ち抜いて東京大学に入学しましたが、そこで学問はしませんでした。日本の中心である東京で様々な人々と出会い興奮していました。また、高校時代に遭遇した三島由紀夫事件や当時流行っていた実存主義的雰囲気から、「決断主義」にかなり毒されていたからだと思います。

本稿のはじめに書きましたように、学問から遠い私が別府大学で職を得てこれまで過ごすことが

できたのは、本当に幸運であったと思います。また、ディーネル教授、篠原一教授、暉峻淑子教授など卓越した学者の醫咳に身近に接することができたことをありがたく思います。日本ミニ・パブリックス研究フォーラムとともに創った畏友・坂野達郎教授（東工大）は、日本を代表する社会工学者、政策科学者ですが、私のような非学問的な人間に長く親しく付き合ってくれました。またフォーラムの仲間たちにも心から感謝します。

私の妻は、ドイツ最古の大学であるハイデルベルク大学で博士号を取得し、その後、同大学で教授資格を得ました。南九州の考古学を専門にしましたが、現在も、ヨーロッパの自然科学者（物理学、地質学、情報工学など）とともにインターネットを通して最先端の研究を続けています。毎日「忙しい」を連発しながら、研究に没頭しているのは、私にとって、学問を身近に感じることができる幸運です。

こうした恵まれた環境の中で「学問の意義」を考え、また、「人生や社会の意義」を考える機会に恵まれたことを感謝したいと思います。本稿は、この意味で私のためのエッセイにしか過ぎません。私の思いを文字化し整理する意味でとても意義がありましたが、読まれる皆さんにとって少しでも意味があったか不安です。もしあったとすれば、望外の喜びです。

## 参考文献

- ・「暗黙知の次元」、マイケル・ボランニー著、高橋勇夫訳、筑摩書房、2003年
- ・「危険社会」、ウルリッヒ・ベック著、東廉、伊藤美登里訳、法政大学出版局、1998年
- ・「君たちはどう生きるか」、吉野源三郎著、岩波書店、1982年
- ・「近代とはいかなる時代か?」、アンソニー・ギデンズ著、松尾精文、小幡正敏訳、而立書房、1993年
- ・「近代 未完のプロジェクト」、ユルゲン・ハーバーマス著、三島憲一編訳、岩波書店、2000年
- ・「コミュニケーション的行為の理論」、ユルゲン・ハーバーマス著、河上倫逸、M. フーブリヒト、平井俊彦訳、未来社、1985年
- ・「シンボルの哲学」、S.K. ランガー著、塚本明子訳、岩波書店、2020年
- ・「専門知を再考する」、H・コリンズ、R・エヴァンズ著、奥田太郎、和田慈、清水右郷訳、名古屋大学出版会、2020年
- ・「パラダイムと科学革命の歴史」、中山茂著、講談社、2013年